



燎原社
(京都の民主運動史を語る会)
代表 岩井忠熊
事務局
京都市左京区高野東開町1-23
第三住宅 33-302 井手幸喜
〒606-8107
tel & fax 075 (722) 3823

【連載】

この一枚

お寺にあった 共産党事務所



共産党府委の事務所があった延寿寺(烏丸六条)。下はその二階大広間で火鉢をかこむ谷口善太郎(左)と河田賢治府委員長(当時)



百畳敷の大広間は会議室と兼用

7月15日は日本共産党の創立90周年記念日。党京都府委員会は「今、再び、日本の夜明けを京都から」の意気込みで、築後43年を迎えた丸太町新町角の同事務所を建て替える方針を府党会議で決めた。

戦後、しばらくは河原町六条の延寿寺の二階大広間が党の事務所兼会議室だった。「俗に『お寺』といえは党府委員会のことを指していた。お寺なので看板は出せず、非合法時代のなごりのようなところがあつた」という(梅田勝「京の夢はでっかい」)。

百畳敷きの広間の片隅に机が置かれ、いつもローラーで印刷していたのは3・15以来の古い党員の稲葉辰蔵さんだった(梅田氏)。私も高校時代に何度か訪れたが、正面に赤旗とスターリンらの肖像画がかかっていたように思う。

60年安保闘争の直後、府庁前の現在地に新事務所を設置、その年の11月の総選挙で、ここを選挙事務所にして谷口善太郎の議席を12年ぶりに取り戻した。

今のビルは1969年10月に竣工した。(3面に党府事務所の変遷を掲載) (湯浅)

日本共産党創立90周年の月に 今、再び、日本の夜明けを京都から。共産党京都府委員会事務所の変遷

200号記念特集 その時、私は 奥田宣子／藤井葉子

【新連載】私の一期一会 ① 井ノ口誠二さんに聞く(上)

【連載】彼らを通すな——立命館「大学紛争」のなかの青春——(8)

山宣の「人生生物学」講義の書記をした今井仙一

記念講演「ハシズム」と「ナチズム」——いくつかの指標から考える

【語る会】2012年度総会開く 15 BOOK 大橋満「世直し」二緒に

会員消息／48年前のAA映画祭の映像／情報スクラップ／編集後記 16

渡辺 和俊 2

佐藤 和夫 4

鈴木 元 6

小田切明徳 9

望田 幸男 12

14

11

16

日本共産党創立90周年の月に

今、再び「日本の夜明けを京都から」

日本共産党京都府委員長

渡辺和俊



執筆者紹介

渡辺和俊(わたなべ・かずとし) 日本共産党京都府委員長。西京区在住。

奥田宣子(おくだ・のぶこ) 故奥田修三氏夫人。宇治市在住。

藤井葉子(ふじい・ようこ) 左京区在住。佐藤和夫(さとう・かずお) 本会世話人。伏見区在住。

鈴木元(すずき・はじめ) ジャーナリスト。国際環境整備機構理事長。西京区在住。

小田切明徳(おたぎり・あきのり) 本会世話人。元同志社山宣会事務局長。伏見区在住。

望田幸男(もちだ・ゆきお) 同志社大学名誉教授。向日市在住。

日本共産党は、党創立90周年のこの7月に向け、1年にわたって「党員拡大を中心とした党勢拡大大運動」に総力をあげてきた。去る5月、党の歴史では15回目となる「全国活動者会議」が開かれ、この「大運動」の成功を誓い合った。

民主主義革命の綱領路線を確定した第8回党大会の前年、1960年に開かれたのが第1回「全活」で、党はこの「全活」をバネに「党勢倍加運動」をやり遂げ、その後の躍進の基礎を築いた。当時は、苦難の党分裂を克服して確立しつつあった路線が党の政治的団結の力となり、この路線が歴史的な安保闘争を中心とする国民的体験と響き合って、党の組織的前進が勝ちとられた。

党と力を合わせる太い流れが

半世紀の時を経て、今、2004年に新しく改定された党綱領と国民的政治体験が響き合う情勢を迎えている。

さる6月6日、京都産業大学の公

式の授業に小池晃党政策委員長が講師として招かれて約100人の学生が参加し、「税と社会保障の一体改革」をめぐる、「共産対京産ガチバトル」と称する「論戦」が交わされた。学生の多くは、「大企業が儲かれば、回り回って中小企業も国民も潤う」という、いわゆる「トリクルダウン」論に立って「論戦」に挑んだが、討論の後の感想では、「消費税に頼らずに社会保障を充実し、財政を再建する道がある」とする党の政策提言への賛同の声が相次いだ。

4月7日には、志位委員長を招いてこの問題での経済懇談会を開いた。ここには、自民党の国会議員を顧問と仰ぐような、京都の中小の建設関連協同組合のトップが多数参加し、消費税を上げずに税・財政改革をおこない、国民の所得をふやす経済の民主的改革を実行してこそ日本経済発展の道であることをつかんだ参加者から、「これで自信を持って『消費税増税反対』を大きな声で言

える」との感想が出され、質疑応答は安保・外交問題にもおよび、これらの人々の党の路線への理解が広がった。

「放射能から子どもを守りたい」「原発再稼働反対」の一致点で、これまでデモに参加したこともない若い世代が、次から次へと各地で立ちあがっている。6月15日、「再稼働」の判断をした野田内閣に抗議する官邸への抗議行動に、若者を中心に1万1千人が参加した。これを巨大メディアはことごとく黙殺し、「しんぶん赤旗」だけが一面で大々的に報道したことが、ネット上で大きな話題になっている。かつて、市民運動の「市民運動」たる所以を共産党と一線を画すことに求める傾向も強かったが、今、立ちあがった市民の多くが、「どうすれば原発のない社会をつくれるのか」をめぐって、日本共産党に答えを求め、日本共産党と力をあわせる太い流れが形づくられている。

消費税問題で「京都民報」に登場

した、保守の立場に立つある商店街理事長は、いみじくも「自民に裏切られ、民主にも裏切られ、気がついて共産党しか残っていないかった」と言ったが、今起こっている変化の根底には、政権交代から3年の政治体験、「自民も民主もダメ」と誰もが語るような、「二大政党づくり」の完全な行き詰まりがある。また、特に若い世代の変化の根底には、これに加えて、大震災・原発事故以来の政治体験がある。

問題は、この大規模な国民的政治体験と、これを背景とする共同の前進を、「アメリカいいなり」「財界・大企業中心」という「2つの害悪」を克服する民主的改革の合意、民主

共産党京都府委員会 事務所の変遷

戦前、非合法の下で事務所はなかった。

1945年11月、再建準備会が和風書院（左京区）で開かれている。中京区衣棚丸太町下ル西側の絲屋寿雄氏宅に党京都地方委員会の事務所が置かれた。



1946年になって河原町五条交差点の東南側にある3階建て民家の一階に。アカハタの集配もここでやった。(写真左)

1948年には河原町六条上ル西側の延寿寺の二階大広間に移転、同年5月の第5回府党会議はここで開かれている。畳敷きの大広間では会議のためいくつもの輪ができて活気に満ちていた。

1949年頃には、延寿寺は会議場所として残しながら、中京区大宮通り松原西入るの民家を借りて事務所に。

1960年、安保闘争直後に現在の丸太町新町角の二階建て民家を購入、府庁前とあって谷口善太郎衆院議員、河田賢治参院議員当選の選挙事務所ともなった。



長い間親しまれていた旧事務所（丸太町新町角）

1969年10月、鉄筋コンクリート造り、地下1階、地上5階、塔屋1階の事務所を同地に建設、竣工式には蜷川知事、富井京都市長らも列席し祝った。

（「京都民報」1969年10月5日付より）

的改革の統一戦線にまで前進させることができるのかどうかにあり、その点での日本共産党の実力が問われている。

60年代の大躍進と事務所建設

1960年の党勢倍加運動で、京都の全地区委員会が党員倍加を達成・突破し、京都は全国を上回る2・5倍の党員現勢を築いた。この直後に、府委員会事務所を現在地に移転した。さらに、1963年の「党勢拡大月間」で、京都が日刊紙・日曜版の有権者比で全国1位になったことを転機に、京都府委員会は、「日本の夜明けを京都から」のスローガンを打ち出した。このスローガンに団結した先輩達の奮闘で、1968

年、定数2の参院京都選挙区で、戦後長く続いた自民・社会の「二大政党」による議席独占を打ち破って河田賢治さんが議席を獲得した。この翌年、現在の府委員会事務所が建設された。そして、70年知事選の圧勝、72年総選挙での1区複数当選と、文字通り「日本の夜明け」にふさわしい躍進期を迎えた。

先輩達の足跡から教訓を

この10年余、小選挙区制をテコに吹き荒れた「二大政党づくり」の動きは、日本共産党を政界から排除する、最大・最強の反共戦略にほかならなかった。参院京都選挙区では2001年以降、4回連続して議席に届いていないし、党の力量のバロ

メーターである比例得票も20万票前後で停滞し、2010年の参院選では15万票まで後退を余儀なくされた。この根底には、党勢の後退、とりわけ根幹を成す党員現勢の後退があり、党の事業の世代的継承に成功してこなかったことがある。

政権交代と大震災・原発事故以降の政治体験を背景に、明らかに国民のたたかいと党の建設に新しい発展の芽が生まれている今ほど、強く大きく、しなやかな、新しい時代にふさわしい党をつくる仕事が大切になっていくときはない。

総選挙での30万比例票実現、1区を初め小選挙区でも議席を獲得すること、参院選挙区議席奪還を大きな目標に、今再び「日本の夜明けを京

都から」のスローガンを高々と掲げて、その実現へ力をつくしたい。そのたたかいの拠点づくりとして、建設後43年を経た党府委員会事務所の建て替え計画も、過日の第73回京都府党会議で決めた。

「日本の夜明けを京都から」の合い言葉を、2010年代の現実の目標として実現するためにも、京都の日本共産党と民主勢力の「歴史に学び、歴史をつくる」立場で、先輩達の足跡から教訓を汲みとることが何より大切になっている。その点で、京都の民主運動の歴史を語り継いでこられた「療原」のみなさんのご努力に敬意を表し、今後のさらなる充実を期待したい。

父の思い出

「共産主義者」と聞きシヨック

奥田宣子

幼稚園のとき「満州事変」、小学校で「日支事変」、女学校では「大東亜戦争」と文字通り戦争という時代背景の中で私は育ちました。

「東洋平和」「八紘一宇」「聖戦」、私は何の疑いも抱かず、先生の教えをよく守る優等生の何の屈託もない軍国の少女でした。ところがある夜、姉と寝床を並べて話している時、「お父さんは共産主義者なんよ。今でも尾行がついているんよ。前に朝早く目がさめてみたら、巡査が沢山ドヤドヤやって来ていた。どんなに怖かったか」とその時の模様を話しました。青天の霹靂、寝耳に水とはまさにこのこと、私は目の前が真っ暗になる思いでした。あんなに優しい父様がそんな恐ろしい思想をもつ筈はない。何かの間違いに違いない。そ

うだとしたら一時魔がさしたのかも知れない。私は打ち消し打ち消し、あまりのシヨックに眠れぬ夜を過ごしました。

翌朝、父と顔を合わすのが恐いと思いつながら、朝の挨拶を交しました。何時もとちっとも変わらぬおだやかな優しさをたたえた顔を見て胸をなでおろしました。

その日から授業中に、共産主義とか社会主義とかいう言葉が先生の口から出るたびに私の顔は火のようにほてり、顔を上げることが出来ませんでした。

そんな女学生時代の或る日、私を慕ってくれていた仲良しの友達から招待を受け家へ遊びに行きました。友だちは心からもてなしてくれて、家族のアルバムを説明しながら見せてくれました。「この兄つたら人相悪く写っている。まるで共産主義者の顔みたい」といいました。私にはひどくこたえました。小学校の校長先生を父にもつ、人のいいその友人は決して悪意で言っているのではないことがわかっていましたし、何も知っていないのだと、却ってホッとして苦笑いでその場をつくろって

いたことを今でもはつきり覚えていません。父は実に人相のよい好男子で、一緒に歩くのが得意な程でした。

戦争がたけなわになると、兵隊も20歳以上の召集だけでは足りなくなり、中学生から「予科練」というのを募集しはじめました。私の弟も当然学校から話がありました。めったに怒った顔を見せたことのない父が「けしからんことを」とはげしく拒否の言葉を出しました。予科練行きは父の反対で逃れられましたが、間もなく学校を遠く離れて、学年全部が軍需工場に動員されてしまいました。

伝えてみました。父の両の眼からホロホロと涙がこぼれ落ちました。だが何も語ってはくれませんでした。私はそつとその場を離れました。老母へのいたわりの涙だと思いましたが、何であの時真実を語ってくれなかったのだろう、真実を知れば私は長い間あんなに悩むこともなかったのにと恨めしい気持ちもいたしました。

でも今、父の涙を思い出す時、老母へのいたわりの涙だけではなく、大家族を抱えた父の立場、幼い娘に真実を語れないつらさ、もし共鳴したとしてもそれは牢獄への道しかなかった時代なのだから。

自分の家が富んでいても、あの昭和初年の恐慌期、食べるに事欠く人をととも座視できなくて、はじめは慈善事業をしていたようですが、真の解決は出来ないことを知って共産党のシンパになり、惜しみなき支援を送ったようです。

治安維持法はこのような父をも、三・二五、四・二六事件に連座させたのです。人々の眼をおおい、口をつむらせ戦争への道をつき進んだのです。まさに反共は戦争前夜の声なのです。

戦いが終わってから本当のことを知った私は誇らかに晴れ晴れと父と肩を並べて野坂参三歓迎集会や宮本顕治、百合子夫妻の文芸講演会にも出かけました。父の選んだ夫と結婚し、

その時

私は。。。

200号記念特集

ささやかながら私の今の新婦人活動

は、美しい未来を信じながら逝った亡き父への鎮魂の歌なのかもしれない。(故麻田哲雄氏息女、故奥田修三氏夫人)

(新日本婦人の会宇治支部「私の戦争体験」1979年発行より。紙面の都合で一部割愛させていただきました)

学力テストに反対し抵抗 中学生の頃

藤井葉子

昭和22年生まれのはあの60年安保闘争の頃小6〜中1でした。御堂筋と河原町通りのフランスデモをテレビで見たときは胸が一杯になりました。ゼネストというのもこの頃初めて聞いた言葉です。全産業がストライキをやる、そんなことが本当にあるのかと思いつながら親たちの話を聞いていました。

大学生のデモに高校生が混じっていると聞いて、テレビのニュースで見ているしかない子供の立場が恨めしく、早く高校生になりたいと真剣に思ったことをよく憶えています。

中学2年のとき初めての全国一斉学力テストが行われ、3年生の生徒会長が校長先生と話し合いをしようとして先生たちともみあっています。先生や母親たちの反対運動は

つと続いていました。当事者として3年生になったとき友人2人と何かポイコットできないかと真剣に考えたのですが、白紙で出すのが一杯の抵抗でした。

重苦しい何時間かが過ぎ最後の科目になったときです。苦手な英語の先生が試験監督で来て「内申書に影響があるからちゃんと受けるように」と説得され、友人たちは先生に従いました。私はもうどうでもよくなり、いい加減な答えを書いて出しました。何だか中途半端なことになりました。何だか落ち込んでいたのですが、組合の先生から私たちの行動を「評価している」と母に伝えられ、少しホッとしたのを憶えています。

そして高校全入運動。蛭川さんの「15の春は泣かせない」の言葉どお



学力テスト反対闘争で処分されたが「免職取消」を勝ち取った先生たち (1972年4月)

り高校入試を控えた15歳でした。当時中学2年と3年の子供たちが川端の教育会館に集まっていて、何を話していたのか何をやっていったのか中身については記憶がないのですが、教員組合の先生の話を聞いたり、お互いに話し合ったりしていたように思います。

当時、川端の教育会館は建物が古く床が抜けそうなぐらいだったので子供たちは「お化け屋敷」と呼んでいました。民主少年団を作ろうという話を聞いたのもここででした。自分たちの集まりという組織ができることに少しワクワクしていました。

『燎原』の合本「電子ブック版」発売!

CD-ROM版 各巻価格 3000円 (送料共)

- 第1巻 (創刊号から第50号)
- 第2巻 (第51号～第100号)
- 第3巻 (第101号～第150号)
- 第4巻 (第151号～第200号) = 新発売!

*ご希望の方は、事務局まで電話またはFAXでお申し込みください。

京都の民主運動史を語る会 TEL&FAX 075-722-3823 (井手方)



私の一期一会

井ノ口誠二さんに聞く(上)

―京商連事務局長や京都市議を歴任した井ノ口誠二さん(80歳)は故西口克己氏(1913年4月6日生)1986年3月15日没。享年73歳)との出会いがなければ、自分の生き方がみづからず、どうなっていたであろうかと述べます。二人の出会いと西口さんってどんな人という時代背景からお話しください。

(補筆及び文責・佐藤和夫)

作家と議員の二足のわらじ 西口氏、波乱の革命的生涯

作家と地方議員の二足のわらじを
はいていた西口克己氏は、1913
(大正2)年4月に伏見区中書島遊
郭の一番の店の長男として生まれ
ました。小学校を5年、旧制中学校
を4年で飛び級卒業を重ねるなどい
わゆる「神童」伝説の人であり、そ
の一方では生家が中書島遊郭の女郎
屋というコンプレックスで悩む多感
な三高の文学青年でした。東京帝国
大学の文学部西洋哲学科にすすみ、
思想的には唯物論者となり「2・26
事件」の1936年卒業。暉峻義等

氏の労働科学研究所所員として「勤
労青少年日記」の編集を担当し、全
国の農村や工場などを調査し報告を
まとめました。暉峻氏も「唯物論研
究会」の発足時の世話人でしたから、
隠れキリシタンならぬ「隠れ唯物論
者」の西口さんを採用したのでは。

とはいえ研究所自身も総力戦体制
下の産業報国会運動の一翼を担わさ
れていますから、労働力の保全とい
う「生産力学説」を建前とし「戦時
下の日本勤労新体制確立」を呼号す
る「奴隷の言葉」で語らざるを得ま
せんでした。

1944年に労研を辞め、空襲下
の東京から京都に、身重の妻ととも
に疎開。敗戦の翌年、1946年に
郷里の京都で西口氏は日本共産党に
入党し、その年4月に開設された共
産党学校の講師として唯物史観の講
義を受け持ちました。

1951年4月、戦後第2回目の

一斉地方選挙では、いわゆる「50年
問題」の党の分裂選挙で国際派(当
時、徳田・野坂分派と派閥対立して
いるかのような認識の不十分さがあ
ったための自称ですが)から立候補
し、徳田・野坂分派(当時は所感派
または主流派とレッテルを貼ったも
のですが)には勝ったものの、惨敗
しました。

この「50年問題」による党の分裂
で、西口克己氏は党を除名されまし
た。1955年7月の「六全協」に
よる党の統一を受け、西口克己氏は
復党をはたしました。

西口氏が党を除名され復党するま
での5年あまりの期間が、西口氏の
生活が荒れ、忌避し嫌っていた女郎
屋を「生活の糧」とするために再開
するという誤りを犯しました。一方
では、自らの生きてきた証しとして
江戸中期の伏見の町衆一揆を小説化
した『文殊九助』(後に改題『直訴』
や自伝的長編小説『廓』を書きまし
た。

西口氏は、父親をモデルとした女
郎屋渡世の無法な男の一代記を資本
主義が必然的に生み出す貧困のひと
つの現れとして、小説『廓』で描き
出しました。職業作家として政治的

無色を装うのではなく小説を書く
内的動機を鮮明にすることで、商業
ベースに乗ることも峻拒するという
「未踏の道」を選び取りました。『廓』
の二部・三部と展開させた執筆の内
的な動機は、自らの贖罪と再生の葛
藤を通じて当時の娼妓運動に欠落し
ていた業者や従業婦の転廃業後の生
活を「問題提起」することだったと
思います。

後年、地方議員となった西口さん
は演説の最後にもいつも、「日本共産
党万歳」と絶叫しました。日本共産
党が統一を取り戻し、人民に奉仕で
きる喜びを込めてのことと思います
が、除名され生活が困窮する中で「女
郎屋稼業」に自ら手を染めた誤りの
自己批判の機会をあたえられ、再び
社会変革の戦列に加わられたことの喜
びと「不転の覚悟」がそう叫ばせ
たと私は受けとめていました。なぜ
なら、私自身がそうだったからです。

―それはさておき、西口さんは遊郭
の片隅に逼塞する時代でしたが、当
の井ノ口さんは西口さんとうい出会
ったんですか。

「人間って変わるもんだ」 パチンコ・麻雀から脱皮

共産党中央発行の「月刊学習」
1972年11月号に、西口さんが
『廓』 始末記―京都市伏見区中書島

西口克己さんとの出会いと

廓を学生下宿に」の運動

の新たな息吹き」と題して「人間問て変わるもんだなあ」という話を載せています。遊郭を学生下宿街に街ごと変える運動のセミ・ルポタージュです。親の代からの女郎屋をいろいろな事情でやむなく引き受けさせられていた「大学出のインテリの若い店主」が、西口さんに説得されて話のわかる業者に学生下宿への転業を一人ひとり説得していく私のことを描いたルポです。

そのころ、私の生活は半ば自棄気味で「立てばパチンコ・座れば麻雀、歩く姿は着流し姿のいなせな、誠やん」を地で行く生活でした。西口さんから何か自分の進むべき道を指し示されたような気がしたものです。

1956年5月21日の売春防止法の成立と2年後の全面実施による「赤線廃止」が間近に迫る1958年初め、中書島遊郭65軒の組合総会で、33対32のギリギリの賛成多数で学生下宿への転業を決議しました。当時は京都府下の八幡町（当時）の橋本遊郭では全員が家族ぐるみ自民党に集団入党して、売春防止法の実施延期を働きかけようかという動きのある中で、遊郭を住民自らの手で学生下宿街に転業するというのは大変話題になりました。そして最終的に約20業者で「学生寮企業組合」をたちあげました。

企業組合に係わる申請書類などは井上秀雄氏（部落問題研究所員・共

産党伏見地区委員、西口著『Q都物語』都大路の章の伏見区画整理反対同盟の指導者）がまとめました。その後いろいろな業種への転業もでてきました。

そうした中で、徴税強化に対して業者運動の機運も高まってきたものです。伏見区区画整理反対同盟の行動隊長格の藪良雄さん（戦時中は陸軍砲兵隊将校）が、税務署で先駆けのレッドパージを受け、経理屋のような仕事をしていましたので、私は税務会計の無給見習いをさせてもらいました。

1962年11月、17人の小売業者会員で伏

見・宇治民主商工会を再結成し、わたしは事務局常任を当初無給で引き受けました。1970年11月に宇治地域を分離独立させ、1972年11月に伏見民商として10000人の会員を達成しました。私は1962年12月に西口克己さんと藪良雄さんの推薦で入党しましたが、1972年9月4日付「赤旗」紙上で「赤旗日曜版」を1年間つづけて民商グループ細胞（現・支部）で毎日拡大をす



伏見民商の税務署へのデモ(左端が井ノ口氏、その右は西口氏。1972年3月13日)

る成果を上げつづけたと報告されました。「まことに、人間とは変わらうるものなのです」と西口さんにまとめていただきました。

大阪の遊郭で焼け出され
転々、中書島に落ち着く

—もう少し井ノ口さんの生い立ちを
かいつまんでお話しください。

1932（昭和7）年1月、私は

大阪市西区の松島遊郭の中に二軒の女郎屋を持つ家に生まれました。父親は四国の徳島県の農家出身の18歳で志願した職業軍人で、除隊後地域で在郷軍人会の会長などもしていた女郎屋の入り婿でした。ですから、西口さんの「女郎屋の子」という後ろめたさには、私自身実感がありません。

1945年3月の大阪空襲で焼け出され、母のつてを頼って居所を転々と変えつつ、最後に陸軍准尉だった父親のつてで大阪府三島郡島本町の陸軍第四師団第八連隊演習場関連の官舎に移り住みました。そこではじめて、18歳で徴兵されていた長兄をのぞき、長姉・次姉・三姉・私の親子6人がそろって、敗戦を迎えました。旧制大淀工業学校2年生の時でした。中学生といっても、入学後1カ月もしない内に勤労動員で大阪市北区の毛馬の閘門近くにあった「川西航空機」関連の工場で働かされていましたし、13歳の子供が航空機の部品を旋盤で削ったりしていた訳ですから、ろくに勉強していません。

1945年9月には、大阪府三島郡島本町から京都市下京区河原町七条まで、リヤカーに家裁道具一式をのせて運び、2カ月後に、母親のいとこがいた中書島遊郭の東柳町499番地に落ち着くこととなりました。遊郭からまた遊郭への生活と

なりました。

敗戦直後は、外地からの引き揚げ者、空襲での被災者などいろいろな「住宅難民」の事例がありますが、空襲被害のなかった伏見は「焼け跡・闇市の戦後の原風景」とは異なります。しかし16師団のあった軍都伏見に転居してきて、学校の方はどうでしたか。

立命大では野球サークル、
わだつみ像歓迎デモに参加

住まいが大阪から京都に変わり、旧制工業学校からの京都の学校に転校しました。このころ学制改革により旧制中学卒か新制高校の2年にすすむかの端境期にあたりました。

当時、統制経済下に商業学校から工業学校に改組されていた「京商」に私は一時籍を置き、市立第二工業（現・伏見工業）の空き待ちをし、学制改革時に京都工業がもとの京都商業に戻るとき、1948年10月に市立第二工業も市立伏見高校となりましたが、その機械科2年に編入となりました。旧制中学校4年で卒業するの1年残って新制高校で卒業するのが選択できるときに新設高校の2期生として卒業しました。そして、1950年立命館大学の理工学部に入りました。大学では野球サークルに入ったたり、麻雀にこった

り、とにかく戦争を忘れたかったことにつきまます。

そんな時、立命館大学広小路校舎に「わだつみ像」の建立を迎えようというよびかけは、ころをうちました。全学連が学園復興会議を京大で開催し立命大の「わだつみ像」歓迎集会に合流する無届けデモを敢行しました。私は隊列の最後尾に参加し、いわゆる学生運動の活動家などではありませんが、荒神橋事件（1953年11月）に遭遇したもので

す。話は横にそれますが、後に府会議員になった伏見の松尾孝さんも京大生としてデモの先頭の方のいたこととすし、また「第二次京大事件」の時の府学連のリーダーだったM君が、中書島の学生下宿にころがりこみ、Wさんの家庭教師のバイトをしていた時期もあります。その彼が西口さんが府議になった1975年当時には、社会党の府会議員になっていました。こちらも「人間は変わるものだね」というもう一つの事例でしょうか。

さて、1954年の卒業当時は朝鮮戦争停戦により特需景気も後退し、デフレ経済でまともな就職先もなく、ちよこつといつてはすぐやめるような状況で、やっと見つけた正社員採用の会社では、3か月でやめるはめになりました。社内の身体検査で結核と診断され、やめざるを得ませんでした。

この当時は、ほんとうにニヒルになっていたものです。「立てばパチンコ、すわれば麻雀」の世界。そんな時、不遇をかこっていた西口さんの下宿屋に居候していた人から麻雀をさそれれ、西口さんと個人的に知り合い懇意になりました。

それでも本当にやりたいことを見つけてようとしていたのではと思いません。郭の中の青年会活動で子供を集め蓬萊橋の南詰めにあった検番の2階の百畳敷で夏休み子供勉強会の世話役などもしていました。

郭にころがりこんだ私も一家は、退役軍人の父が軍人恩給を握って世捨て人のような別会計の生活で、朝起きてリヤカーに肥え桶を積み込み宇治の横島や枚方に借りた農地に野菜作りをしに行っていましたし、おばからのれんを引き継いだ母は女郎屋を経営し、私とはいえば結核の自宅療養中の身で「家事手伝い」のような始末でした。いずれにしても、人身売買が本質の女郎屋稼業はともてて大学出のボンボンにとまる世界ではありません。

小説「廓」のベストセラー と売春防止法の成立

1956年5月21日の売春防止法制定から1958年4月1日の同取締罰則が施行されるまで「娼娼問題」が社会問題になっていましたが、そ

れが転機ということですか。

1956年1月、西口克己氏（当時43歳）が、当時京都に本社があった三一書房から自伝的長編小説「廓」第一部を上梓し、空前のベストセラーとなりました。三一書房の田畑弘さんと西口さんは1946年春に「新日本文学会」の立ち上げを一緒した縁とお聞きしています。

少しまた、横道にそれますが、1945年の敗戦直後に西口さんはフランス文学の淀野隆三氏などと洛南文化協会を立ち上げ、淀野氏の実家のあった大手筋商店街の両替町4丁目東南角で洛南文庫運動をしました。空襲でトラック2台分の蔵書を失い、実家の女郎屋に帰ってきたものの活字に飢えていた西口さんはお互いの蔵書の貸し借り回し読みをしていたとのことです。故西村清三氏（旧友クラブ世話人・桃山町泰長老居住）も出入りしていたと思います。ところで、直木賞候補になりながら、本人が辞退するとか、戦前の人気活弁士の徳川夢声氏の「問答有用」（週刊朝日・1956年4月8日号）対談などにも登場し、まさに西口さんは時の人でした。

1955年から1958年とはそんな時代でした。売春防止法成立で郭をどうするのかという社会問題です。

（以下次号）

【連載】

彼らを通すな

—立命館「大学紛争」のなかの青春—

■第8回■

鈴木 元

「立命館全共闘」の登場

1968年12月12日、立命館学園新聞社の民主化を目指して内藤三義君等5名が入社の申し入れを行った。この時の判断や行動についての評価は別途詳しく展開する。

当日居合わせた新聞社のメンバーの対応は「急にこんなに大勢で申し入れられても判断がつかないので、とりあえず明日まで待ってくれ」ということであった。

12月13日、内藤君らが再び新聞社を訪ねた。そこでの結論は「これは新聞社の乗っ取り策動だ。入社を拒否する」ということであった。

「私物化は許されない。入社を認めろ」「乗っ取り策動は認められない。入社は拒否する」との押し問答が、新聞社の入り口で延々と繰り返された。心配で様子を見に駆け付けた学生40〜50名が新聞社と廊下を挟んだ向かい側の存心館16号教室に待機していた。

その時、突然隊列を組んだ100名程の学生が現れた。そのうち50名

位はヘルメット、ゲバ棒姿であった。そして「新聞社の仲間を奪還する」と叫びながら、存心館16号教室にいた学生達を襲撃し始めた。これが立命館大学で我々がヘルメット、ゲバ棒姿での襲撃・暴力行動に遭遇した最初の事件であった。のちに彼らのビラで知ったのであるが、当日「立命館全学共闘会議準備委員会」が結成されていた。

新聞社問題巡り異常な事態

12月14日、文学部の清心館前で学友会が「新聞社問題を巡っての暴力事件糾弾集会」を開催していたところ、150名ぐらいのヘルメット・

ゲバ棒の暴力学生が現れ、集会を暴力で襲撃した。準備していなかった我々は総崩れとなって逃げ出さざるを得ず、集会は流会させられた。制止に入った教職員に対しても暴力が振るわれ、学生・教職員合わせて30名余りが負傷させられた。私も逃げる時、背後から肩、背中にかけて二回、生まれて初めて角材で殴られた。

当日、政府・文部省は東京大学、

東京教育大学に入試中止を押し付けた。東大「全共闘」の犯罪的役割が明確になった。ところが同じ日、中国の新華社通信は、東大民主化を求める学生を「日

共修正主義裏切り集団」と攻撃する一方、暴力学生を「勇敢な戦士」として激励する見解を表明した。

この日を境に、連日、学友会の「新聞社・全共闘への抗議集会」と「全共闘」による「学友会糾弾集会」が狭いキャンパスで一触発発の状態で行われ、学園は異常な事態となっていた。

12月29日、東大全学部、東京教育大学4学部（体育学部を除く）入試中止を決定。私たちは大晦日も元旦も登校した。そして私は「現局面と打開策」「学友会の大学に対する公開要求書」を書いた。

1969年1月8日、一部学友会「大学当局に対する公開要求書」を提出。

1月10日、東京大学当局と七学部学生代表団が秩父宮球場において東大問題の自主解決を合意した。ところが政府は東大に対して交わされた「確認書の破棄」を要求した。

中川会館封鎖と解除行動

1月11日、「全共闘」(準)は、総長・理事会との大衆団交開催要求書を提

出し「応じない場合は大学本部を封鎖する」と宣言した。

1月13日、立命館大学寮連合は舎費撤廃、水光熱費全額大学負担などの「寮8項目要求」を掲げ、大学本部のある中川会館の総長公室で大学(学寮委員会)と徹夜団交、以後継続。

私立大学の寮はもともと全学生の学費に依存しており、ある意味では学生の相互扶助の精神に基づいているものであり、その寮費をどの程度にするかは寮連合と大学側とだけの交渉で決定すべきものではない。また学生の自治の一環である寮自治についての重大な変更も全学的な場で討議すべきものであった。しかるに寮連合は大学に対してイエスカノーかと迫り、大学側が彼らの納得がいかない回答をすると「中川会館の封鎖を実施する」と恫喝していた。

1月14日、京大寮闘委、京大当局を相手に徹夜団交を実行。

1月16日、立命館大学寮連合は大学回答を不満とし中川会館を封鎖した。そして交渉相手であった大学側の学寮委員11名をその中に軟禁した。(その時、中川会館の金庫に入試問題が保管されていたことが後に判明)。

学友会、研心館四階で緊急抗議集会を開催し(約400名参加)封鎖反対を決議。同じ16日、京都大学において「寮闘委」が学生部を封鎖。

立命館大学も京都大学も同じ1

月16日に封鎖行動が行われた。明らかに連携した行動であった。なお私は後で知ったことであるが、この1月16日に東大の加藤一郎総長代行は機動隊の出勤を正式に要請し、18日19日に、機動隊による安田講堂封鎖解除行動を行うことが決定されていた。京大、立命館で1月16日同時に封鎖が行われたのには、相当大がかりな全国的陰謀的行動であったと推測される。

1月17日、拡大学振懇が開催され「封鎖の自主解除」「教職員即時解放」を決議した。大学は六学部長連名による「全学生諸君に告ぐ」の声明を出した。その内容は「既に4昼夜にわたる団交が行われ、16日以降は封鎖された中川会館の中での大衆団交が行われている。理事会は大衆団交に応ずるべきではない、学寮委員の身柄を解放し、かつ中川会館の封鎖を解除することを要求する」の三点であった。



中川会館の封鎖解除・教職員の解放を訴える末川博総長（69年1月18日）

1月18日、五者共闘会議（一部学友会、二部学友会、教職員組合、生協理事會、生協労組）の申し入れにより大学主催の「全学抗議集会」を開催し存心館前に2000名が参加した。そして大学は「全共闘」に対して「20日付で封鎖を解除し、教職員の身柄を解放することの最後通告を決定」した。

同じ18日、東大に8500名の機動隊が入り、東大安田講堂の封鎖解除行動が行われた。

1月20日、東大当局が文部省の入試中止を受け入れる。そして翌21日に東大当局と7学部代表団の間で「15項目の確認」が批准された。

5者共闘参加で1万人集会

1月20日、立命館大学主催、五者共闘参加で「一万人全学集会」が開催された。大学を代表して末川博総長自らマイクで全立命人に向かって演説された。

全共闘は学内世論の高まりもあって、また狡猾に学内世論を巻き返すために軟禁教職員を解放したが封鎖は解除しなかった。ところが、釈放された学部長は正門の守衛室の上に登り、封鎖学生から手渡されたハンドマイクで「私たちは軟禁されていなかった、真摯に話し合っている、大学は学生諸君の声を傾ける必要がある」と演説しだした。全く異常なことであった。

これはその後の逆流の始まりであった。そして、「20日の学部長の演説」の趣旨をまとめた声明文が、学部長以下軟禁されていた6名の教員の共同声明として発表された（当初軟禁されていたのは11名であったが、途中で体調を崩し5名が「釈放」されていた）。

1月21日、全学部で五者会談を開催。ここでは先の軟禁から「釈放」されて出てきた11名の教員の「軟禁されていなかった、大衆団交に応ずるべきである」との意見が強く反映し始めていた。当日、大学は二部の後期試験の延期を発表した。

当日、学友会と理事会との団交は封鎖解除を巡って争われた。私は学友会を代表して「いつまでも封鎖を許しておけば、入試の執行に差しさわりが出るし、警察の介入を許すことになる。一刻も早く封鎖は止めさせなければならぬが、彼らは説得で聞くものではない。もはや実力行使しかない」と主張した。

これに対して大学側は「入試が近づいており慎重にしなければならぬ。学校という場で暴力を認めるわけにはいかない、今しばらく説得しかない」という立場で平行線であった。

1月22日、学友会の中川会館封鎖解除行動を起こした。立てこもった者を外から解除することは容易ではないことは歴史的に軍事戦で証明さ

れている。そして元々中川会館は教室棟ではなく本部の建物として作られ、入り口や窓が少ない建物であった。その上に1月16日の封鎖以来、日を追うごとにバリケードは強化されていく、簡単には解除できなかった。

しかし何よりも決定的なことは、中川会館と我々の間に体育會有志のメンバーを中心に「実力行使反対、学友会は話し合え」の人垣ができたことである。彼らと乱闘することはできない。彼らを説得しながらおしくらまんじゅうで徐々に排除するまでに時間がかかり、実際に封鎖解除行動に入ったのは深夜になった。そのころになると建物の屋上などから激しい投石、中には近所のお寺の墓石まであった。そんな中で可動式机の上へベニヤ板を乗せた防御板を頼りに近づくと屋上からの投石で防御板は次々と崩れ破壊され多数の負傷者が出たが解除に成功しなかった。

相次ぐ辞任、重大な困難に

その日の夜、天野和夫教学担当理事、文学部の三役すなわち林屋辰三郎文学部長、山本幹雄、佐々木高明、そして名和猷三経営学部長、橋本次郎理工学部長が辞任を表明した。一時的とはいえ学園としての執行体制は重大な困難に陥った。また文学部は林屋学部長以下三役が辞任してしまったのであるから、学部の執行体

制が機能マヒ状態となった。

1月23日、大学は一部の後期試験の延期を決定

1月25日、26日、両日に渡って各学部教授会が開催された。

1月27日、大学は全学の教授会議論を踏まえ「立命館大学の全学生教職員に訴える」の声明「封鎖に至る経過、解除の方法等」が出された。そこでは「―自主的かつ平和的に解決するという基本的態度を堅持しなければならぬ。あくまでも寮連合との平和的な交渉によって寮連合自らの手によって封鎖を解かすことが、大学の本来取るべき態度である。……学生の『実力』による封鎖解除行動を止めさせることができなかつたことを、大学とくに理事会として痛切に反省しなければならぬ」と考える。「寮連合の提起した問題を素直に受け止め、中川会館の封鎖を自ら解放するならば、学部長理事も出席する拡大補導会議で寮連合との正常な交渉を1月15日の時点に立ち戻って継続する用意がある」とした。

1月28日、学友会は、前日の大学の声明に対する基本的見解を明らかにした。

①寮問題を巡って封鎖の不義不当についてなら批判・抗議せず、大学側は自己批判を表明している。

②そして封鎖解除の実力行動を批判している。

③彼らが自ら話し合いによって封鎖を解く集団であるかの幻想を振りまいている。

④これは暴力にひれ伏し、封鎖を解かないままに交渉に応ずる危険がある。

そして我々の批判と危惧の通り、我々の必死の説得にもかかわらず、翌1月28日の大学「公示」において「中川会館封鎖解除をめざし、学寮問題に就いて寮連合と公開交渉を行う」ことが表明された。

1月29日、我々が指摘した通り大学は、「1月27日の声明」の「封鎖を自ら解放するならば」に反して「封鎖を継続したまま」寮連合と公開交渉を行うとした。

学友会は大学の屈服を許さないうちに傍聴参加を呼びかけた。

「交渉」には傍聴者を含め約3000名の学生が参加し、1月29日の午前11時から開始され、途中2回の休憩をはさんで2月1日午前6時まで延べ4日間、約45時間に及んだ。

その結果、そこでは「寮8項目」要求などはほとんど問題にもならず、1月16日の封鎖とかかわって出された、先の1月17日の六学部長声明が撤回された。この交渉の途中で常務理事、学部長、学生部次長、二部協委員長他3名の交渉委員が辞表を提出して退場した(2月1日)。

(以下次号)

大橋満著 世直しと一緒に

議席占有率33%をきずいた日本共産党 京都・向日市議会議長団長の44年間

1967年に27歳で市制移行前の向日町議に当選、昨年の引退まで44年間、日本共産党の向日市議団長を務めた著者が、議員活動の中のエピソードを綴り、地方議会で共産党議員が増えることの意味を伝えている。

冒頭の「向日市議会選挙、挑戦のあゆみ」では、議席占有率3分の1に至る12回の市

BOOK

議選の流れと主要争点が俯瞰されている。「現代の駆け込み寺」といわれる生活相談活動の様々なケースや、住民運動と手を携えた地域要求実現・市制改革の現地ウォッチングには、「まんさん」と親しまれる著者のエネルギッシュな姿が垣間見える。

日本共産党議員が増えることの意味

後半は市会議事録をふりかえっての市政をめぐる重要論戦のダイジェスト。また、著者が「もうひとつのライフワーク」と

いう日本と韓国・朝鮮との友好の取り組みも議会活動にしぼって紹介されている。

全体として実に多岐にわたる話題が取り上げられているが、それぞれコンパクトにまとめられている。

67年に複数議席を確保して空白議会を克服して以後、全国有数の



議席占有率をもつに至る共産党向日市議団は、12回の選挙で一人の落選者も出していない。住民運動と手を携えた要求実現・市制改革の運動や共産党組織の前進が背景になっているのはもちろんであるが、節目節目での「反共攻撃」「反共包囲」とのたたかいが重要であることが感じられて印象に残った。

ウインかもがわ発行、四六判、1575円。

(文)

山宣の「人生生物学」講義の 書記をした今井仙一

小田切明徳（燎原） 世話人・元同志社山宣会事務局長

1 山宣の「人生生物学」の書記

同志社大人文科学研究所に、標記の記録が見つかったのが2010年の夏のことである。山本宣治の資料はすべて、花やしきの資料館に分類整理され、収納されていたと思っただけに驚いた。

伝えられるところでは、山宣は「人生生物学」の講義を聴講する学生にはノートを取らないように指示した。それは官憲に見られれば、山宣の講義内容が分かってしまう、火の粉が及ばぬようにと細心の注意をして臨んだのだった。すなわち、官憲から検束されぬように、学生各自ノートの証拠とならぬようにと記録担当を置いたわけである。その書記を務めたのが今井仙一であった。そこで、今井とはどんな人かを調べることにした。

私は同志社に32年間勤めていた関係で、この調査は直ぐにわかると思っていたが、甘かった。やはり1世紀前のこと。資料的裏付けを探すに

は時間がかかった。あれこれ訪ねまわることになり、まず、卒業名簿を保管している同窓会から始める。今出川梨木通りに同窓会の看板があったので、うかつにもここを訪ねたが、

ここは同志社女子大の同窓会であった。男子は丸太町寺町上がった新島会館にあった。この間に夏休みの一斉休暇がはさまるとか、個人情報だから、申し上げられませんかとかなかなか接近できない。その壁は厚い。

新島会館の同窓会で教えていただいたのは、「今井仙一、昭和5年同大哲学科卒、下京区本願寺大門前、昭和33年大学哲学教授、昭和52年永眠」そこでインターネットで、同大法学部の紀要で検索してみた。還暦を期した今井の「断片的自叙伝」がでてきた。生い立ちの部分を用いると、

「一九〇〇年京都に生まれる。小学校卒業後、ただちに三越呉服店京都支店に入店、五年間勤務する。一八年退店。その後五年間家業の数珠店を手伝う。二三年春、学問の道を志

し、秋、私立京都中学校四年に編入試験を受けて合格、翌年春同志社大文学科に入学、三〇年、「マイノングの対象論」を卒業論文として同志社大文学部哲学科を卒業。その後同志社専門学校講師、同志社大学予科教授などを経て四八年同志社大学教授に就任」、研究論文・著作「フランス哲学の主要問題」「ウイリアム・ジェームスの哲学」「ベルグソン」「政治哲学の諸問題」等。五一年文学博士。約1世紀前の人だ。

この「断片的自叙伝」には、続いて生家の職業や周辺の様子も記されていた。京都は第2次大戦の戦火は東山の馬町周辺だけだから市内の古いところは、住所を尋ねればご子息・関係者がおられるかもしれないと思ひ、2011年の暮れにそこを訪ねた。暮れるのが早くすぐ暗くなった。場所をしっかりと確認せずに、東本願寺の西側の数珠の店を訪ねた。暗くて表札もわからない。次の機会には今度はと、もう一度、地図で確認しての行動をする。なんと、烏丸通りの東側だった。西側をいくら探してもないはずだ。「中数珠町不明（あかすの）門西入る二十人講町」と「自叙伝」にあったので、ポリスボックスで地名を覚えてもらったところ、郵便局のあたりと聞いたので、「ちょうどいい、局員さんにきけばわかるだろう」

「今井さんという方、この近くに

おられませんか」局長らが地図を広げ探していただいたが、わからなかった。これで、この地には今井さんのご子息はいないことがわかった。もし、おられたら「洛味」66集（昭和32年）を見せていただくつもりであった。この号は同志社の図書館には残っていないかった。著者の今井さんのご遺族にお聞きすれば、わかるだろうと訪問したわけだ。その号には「山本宣治の思いで」が載っていた。たぶん、「人生生物学」講義の書記を勤めた経緯が書かれているはずである。

ところで、なぜ、今井が書記に任命されたのか。それが山宣の「眼力」といえる。今井の独自性・判断力が確かだと踏んだと思う。それは資料室に残っている関係資料を見直してみると今井の同志社予科2年9月（大正13年）山宣の講義を受け、夏休み中に読破した本・ウイルヘルム・ベルシユの著作（田親二抄訳『性的進化論講話』）を読み、その内容紹介を「自然科学レポート」として提出している。彼のクラスは2年E組であった。山宣が今井に注目したのは、多くの学生は、山宣が彼の講義用テキストである『人生生物学入門・性教育私見』で紹介したものを読み、そこからレポートを提出していたが、今井は山宣の紹介リストにな

宣の目に留まって、今井に白羽の矢があてられたのであろう。じつは、この『人生生物学入門・性教育私見』は山宣が性学、性教育の専門家として彼のライフワークとなったものだ。山宣が性教育のバイオニアとして世に出るきっかけになったものであった。

ここでちょっと脱線。私にとって、2012年の冬は多難であった。京都では一大政治決戦である、京都市長選が火ぶたを切っていた。私たちは24号線の通りに面した選挙事務所にはよい位置を確保した。前回、僅差に追い詰めていたから、今度こそ思いがあった。いつも出る泡沫候補は出ず、現職との一騎打ち。「よくがんばった、はいらない、必勝」が合言葉だったが負けた。この選挙で、私は暴漢に殴られた、2週間の軽傷。いわゆる路地裏に「桃太郎作戦と称する4人組」の宣伝活動に出かけた。先頭のハンドマイクを持った女性が案内した、「JR桃山駅での中村候補の演説会にお集まりください」と。この先頭の人重傷、2番手の人がチャシ配布、3番手であった私はプラスターの宣伝ポスターを持った。近鉄丹波橋駅に近いところであった。暴漢に「うるさい」と襲われた。殴られ、倒されたものは救急車により病院へ。事情聴取……。その後、検察へも出かけた。刑事事件は決着が付き、民事は梅雨に入っ



山本先生のこと
今井 仙一
(カッパ 山田 規代)



わたしの書架の一隅に、三千年この方、子が置かれていた。今では色あせた緑いろの緑書体の活字で、人生生物学小引と刷られて下、普通の活字で、二行割りに、一九二五補第六版とある。そして右方に、理学士 山本先生と並んで、さらに二冊の図版集が置かれていた。これは、バウ、トランプ、

たがまだ終わっていない。こんな事件や山宣墓前祭の行事の忙しさが重なり、今井さんの調査は後まわしとなり、半年かかってしまった。

2 『洛味』誌

『洛味』誌が府立総合資料館にあることを、斉藤光京都精華大学教授からお聞きしていたので、資料館を訪問した。その時は、あいにくの蔵書点検で10日ほど閉館であり、足止め。遅れて、6月9日に行き、創刊号と66集を閲覧できた。その「66集」に「山本先生のこと」と題する今井の文章は8ページのもの(約8000字)があり、末尾に4月6日と執筆日が記されていた。

コピーは「洛味」66号(昭和32年5月15日発行)の「山本先生のこと」の冒頭部分。写真は今井仙一氏(同志社文学部教授、還暦記念論集に収められたもの)

冒頭に、今井は書架の片隅に大切に保管してある『人生生物学小引』(山宣の性教育のテキスト)の増補6版の紹介から始め、山宣の性教育を受けた学生は千名を超える聴講生がいたはずであるが、それを30数年経たずして、このテキストを所有している人は少ない「極端に言えば、わたし一人ではないか」、「山本先生の人と業績とを研究する場合、きわめて重要な意味を有する」と書き、当時の山宣の講義ぶりを紹介した。今井は恩師としての山宣を慕い、彼の業績を高く評価したのであった。先に紹介したように、今井は法哲学の専門であり、その立場からの山宣の思想や業績を端的に紹介していた。

せっかくである『洛味』誌にも触れておきたい。創刊号(1号)の後書きを見ると、「趣味とは洗練された感覚である。趣味によって創造の力はやしなはれる。娯楽を欣ぶもの人間の本能である。……文化の源泉ここに存す」(昭和10年3月5日発行・発行所北白川久保田町1、発行者、宮崎小次郎、一冊30銭) さて最後に、この件では多くの方から貴重なアドヴァイスを頂いたが、井ヶ田良治同大名誉教授に問い合わせをした返事のはがきの紹介をしておきたい。今井先生のご親族の方の消息をお尋ねしたのです。

「今井先生の後継者の方がどこにおいでになるか、いろんな人においでみたのですがわかりません。三河屋という三河門徒の定宿を止めて、長女の方が「ロン」という喫茶店を経営してたのですがそれも今はなくなっています、文学部の哲学教授であった「片山寿昭」さんは長岡におられるはずですが……書道の達人で、今井先生が感心しておられました。……先生には男の御子さんがおられたように記憶していますがほんやりした記憶で、現段階では私の手ではこれが限界でせうか。以下省略」と、誠実なお返事(2012年5月29日)でした。

2012年度総会 望田幸男氏の記念講演

総会記念講演の「ハシズム」と「ナチズム」。望田さんは①「ハシズム」
②「ファシズム」（ナチズム）の「まがいもの」なのか、③「右」からの「現
状打破」と「敵」の設定、④政治における「イメージ」、⑤政治におけ
る個性という観点から「ハシズム」とナチズムについてお話し頂きます
た。お話の骨子を紹介します。

（文責・井手）

「ハシズム」とは「ナチズム」 の「まがいもの」？

ファシズムの本質は資本主義の暴力的な支配、ナチスの場合にそのダイナミズムが現れてくるのが1930年、第2党となった時代以降からだ
が、類型論、即ち「上」からの権威主義的な反動と「下」からの運動の結合ということからみると、「橋下氏・維新の会」との違いは大きい。

ナチスの正式名称は「国民社会主義ドイツ労働者党」（第一次世界大戦後ロシア革命を経て、現状を変えるのは社会主義とイメージ化されていた時代）。当初の街頭的一揆主義の時代（1919～25）は、反資本主義がその主張の中心をなしたが、ミンヘン暴動でナチスの運動が挫折、その後は資本家サイドの反共産主義を主張し、合法政党として急速な議席拡大を実現させていったが、その主張は、論理的な整合性というよりは政治的な適応、特定の状況下での恣意的な主張を選択する、要は使い分けをしてきたことにその特徴がある。

対照的な動きであって、単なる保守ではないのだが、「上」から「下」への反動として捉えられるだろう。

現状打破は左翼の専売特許 ではない

それでは、「橋下・維新の会」が引き起こしている政治的、社会的現象をどう読み解くか。ナチスが登場するワイマール期のドイツは、最も議会制民主主義が定着した時代で確かに比例代表制の議会は実現したが、結果、慢性的な政治的不安定性が生み出され、あわせて、アメリカ発の大恐慌で、経済的な大混迷期に陥った。後に、ドイツ国民からも好感度が最も低い時代であるワイマール期

「ハシズム」と「ナチズム」 ——いくつかの指標から考える

化であり、二つの条例にみるように、政策的には新自由主義的成長論プラス保守主義。体制選択としては二重行政の解体、大阪都構想を提唱、更に道州制・首相公選制等を主張しているに過ぎない。躍進期ナチスのような「反資本主義」は希薄で、大阪府議会では単独過半数なのだが政党の体をなしておらず、組織政党とも言えない。生まれたばかりの動きもあり、現時点で言えばナチスとは

が、ナチズム登場の時代的背景を私たちづくる。閉塞感からの現状打破の欲求が強い時代状況については、今日の日本との類似性を見出すことはできようが、加えて大阪の場合は、戦前の繁栄から戦後東京一極集中となり、大都市的な貧困が表出していたことを「橋下・維新の会」は見逃さなかった。

ナチスは、ベルサイユ体制打破、反資本主義から反ソ・反共、反ユダ

ヤ主義を唱え「敵」を設定したが、大阪では、市長或いは市の幹部、労働組合の現状維持のトライアングルを「敵」として設定し、今日の状況が作りだされたと考えられる。

歴史的にみても、「現状打破」論は何も左翼の専売特許ではない。「橋下・維新の会」の登場は、日本における新自由主義の根強さ、社会的な連帯・きずなの構築の遅れとしてみなければならぬだろうが、ハシズム反対だけではなく、「現状打破」論への対抗構想を対峙させる必要があるといえる。社会的な競争の敗者・劣者による他者への攻撃、排他的なナショナリズムへの傾斜にも注意を払いながら、生まれたばかりの「橋下・維新の会」の変化（「敵」をどう設定するか）についても注視していく必要があるだろう。

橋下圧勝、ナチス第一党を どう読み解くか

ナチスには独裁・暴力・侵略のイメージがあるが、それは戦争期のイメージ。歴史的にみれば、街頭的一揆主義→合法闘争と反資本主義→反共産主義（革命への危機意識、財界との呼応）→保守・ナチス連合政権（再軍備に基づく失業者解消、独裁）→戦争へ（国際的現状打破の主張、暴力侵略の党）へと変化してきた。「橋下・維新の会」の「現状打破」論は（次頁下段へ続く）

厳しいなかでも「語る会」の出番

2012年度の総会開く

京都の民主運動史を語る会の2012年度総会が6月9日午後、職員会館かもがわで開かれました。望田幸男氏の記念講演(別掲)に続き、岩井代表のあいさつの後、井手事務局長から会務・会計報告、蓮佛享さんから会計監査報告がありました。

会務報告で昨年の会員現勢より微増で、現在182名の会員であること。昨年の例会開催状況、会誌200号記念の取り組みについて報告(記念原稿「その時、私は」・索引「151」200号)の発行・『燎原』電子ブック第4巻(151〜200号)の発行)があり、厳しい財政状況で、197号から自前印刷に切换え、会誌の発行を続けており、債務と借入金の返済を急ぎたいとする会計報告(下記)。監査報告でも、「債務と借入については早急に改善されたいことと併せ、長期未収分の改善を望む」との指摘がありました。

指摘された点の改善に取り組むとともに、新しいチラシを作成し会員拡大に取り組むことが確認され。会運営の改善のために、新しく会計担当の世話人をおき会の若返りもはかることとして、佐藤和夫・沼本耕典さんに世話人に加わって頂くことに

なりました。

なお、今年度の方針として以下の点も確認されています。

- ・会員拡大と会費前納制の徹底(入会の乗作成と宣伝誌の活用)をはかり、借入金の返済と債務の解消をおこなう

- ・『燎原』電子ブックの普及とHPの活用

- ・会員の紹介、或いは聞き取りや歴史の掘り起こしをおこなう等、引き続き『燎原』誌面の充実をはかる。

2011年度収支一覧表 (2011年4月~2012年3月)

収入		支出	
項目		項目	
前記繰り越し	-129,100	会誌印刷費	350,167
会費	430,000	発送費	117,891
名刺広告(賛助会費)		総会・例会費(会場代・講師代)	
	125,000		21,900
カンパ	23,000	編集費	0
雑収入	16,240	事務費	12,528
		封筒印刷費	23,625
合計	465,140	合計	526,111
			-60,971

*雑収入→例会一般参加費・1部売り・懇親会収入等

*会誌印刷

194~196号(ニップロ・1号に付き97,650)

197~199号(自前印刷・1号に付き23,999)

*未収額

過年度 192,000

*債務残高(ニップロ) 265,095

借入金 201,000

会計監査報告

債務と借入については早急に改善されたい。
長期未収分の改善を望む。

2012年6月7日
蓮佛 亨



どう展開するか。イメージアップさせているのは「橋下支持」現状打破、反橋下「現状維持」、これから先は未だ見えていない。争点が単純化され、ナチスの際の「食えない民主主義」か「食える独裁」か。同じように、「決まらない民主主義」か「決定する独裁」か。といった争点の単純化も進んでいることには注意する必要がある。

政治における個性、終わりに

政治的なリーダーの果たす役割も見逃せない。「ラジオなくしてヒトラーなし」「強い独裁者が弱い独裁者か」。リーダーは常に世論形成、操作に重大な関心を持つ。橋下の場合、マスコミや新しいメディア・ツイッターの活用になるのだろうか、「すべては憲法9条が原因だと思っています」は爆発的なブームになった。「確定申告の準備が遅れているのは憲法9条が原因」といったユーザーたちの発言も、パロディとも読めるのではないだろうか……。

いざれにしても、新自由主義との対抗軸の探究が必要とされているが、特に、震災後の国民的に気付かれつつある、反原発を軸にしたライフスタイルに注目すべきで、「右」からの「現状打破」論に対峙する政治社会思想が求められている。民主主義のまわりくどさなのだが、具体的な事実に基づいて、反市民性を丁寧説明、説得することも大事になるだろう。

会員消息



清水三男について教えて

廣庭基介（左京区）

私は、1948年4月に京大文学部図書室に就職しました。そこに清水浩という結核病みの青年が、中年か分らない人が働いておられ、私に作文・作詩などを教えて下さいました。この人のすぐ上の兄さんが、清水三男でした。三男さんは、人民戦線事件で懲役2年、執行猶予3年の刑に処せられ、それ以降に書かれた中世荘園関係の論文や啓蒙的図書は、屈服の作品と言われたり、いや以前の論文はよくない、とか評価されます。

どなたか、清水三男について教えて下さい。

「上京会」が解散に

浦本信子（左京区）

1952年の上京区役所の一斉職暇闘争参加者の集まり「上京会」が平成24年に解散の通知を受けました。第一回から第十二回まで案内を受けて居りました。一〇〇名の方々とお会い出来ていましたが残念です。

谷口善太郎の足跡を辿りたい

伊藤哲英（東山区）

先月号に加藤則夫さんの『たにぜんの文学』の紹介がありました。『谷口の文学を語る会』で没後40年になる2014年には、谷口善太郎の足跡を辿りたいと思っています。

二人の会員を増やしました

藤原ひろ子（北区）

「療原」を読ませていただき、これは、これは会員を増やさなければ申し訳ないと思いました。「名もなく貧しく心美しい年よりたちの語らいの会」の仲間に、「京都の民主運動史を語る会」の歴史を訴えて、お二人に入会を承諾いただきました。

歴史の一隅の証言を残して

黒川美富子（下京区）

月曜から金曜までフルタイムで働くために、土・日は出かけることにしていますので、ご無礼します。200号誌の岩井先生の文章を読んでいて、本誌もだんだん、私たちの世代になっていくのかなと思いました。でもまだ早い。たくさんの方々に、歴史の一隅の証言を残して頂きたい。

いつも元気をもらっています

山下茂（左京区）

「療原」にはいつも元気をもらっています。「語る会」の活動の大切さが、私自身何も出来ない身体になって、ようやく分かってきたような次第です。望田さんとは55年から60年程前に一緒に活動させてもらい、いろいろ教えて頂いたことを今思い起こしています。

堀昭三氏が「48年目の回想」

インドネシアでのAA映画祭をDVDに

元京都労映会長の堀昭三さん（84歳）がこのほど1964年にインドネシア・ジャカルタで開かれた第3回アジア・アフリカ映画祭の記録映像をDVD45分に編集、完成させた。

当時、堀さんは37歳、日本代表団（映画「荷車の歌」と監督の山本薩夫以下6人）の一員として参加、8ミリフィルムに収めた。しかし、忙しさと、その直後に起きた反スカルノ政変による友人たちの運命が気がかりでお蔵入りさせていた。

時は過ぎ、今また新しい息吹きを見せて来たインドネシアに思いをはせ、当時の状況を復元、音楽やナレーションも入れた。

映像には、スカルノ大統領の演説や、官邸での授賞式、大統領のダンス、バリ島における野外劇など珍しい場面もある。堀さんへの連絡は電話211-6802。



情報 スクラップ



谷口善太郎墓前祭に60人

谷口善太郎墓前祭が6月3日、東山区の大谷祖廟で行われ穀田恵二衆院議員、井上哲士参院議員ら党幹部

や地元東山の人達など60人が参加し、偉業を偲びました。

谷善は1974年6月8日に74歳で亡くなりましたが、最近、プロレタリア作家としても再評価され、研究書も刊行されています。

墓前祭に続き、今熊野の即成寺で偲ぶ会が行われ、寺前巖・元衆議院議員が国会で田中伊三次（自民）が述べた谷善追悼演説などを紹介しました。

催し案内 第32回平和のため 京都の戦争展 7月31日（火）～8月6日（月）立命館大学国際平和ミュージアム。8月6日午後には小畑哲雄氏が「平和を追い求めた青春―50年代の学生運動」について講演する予定。



今号は16頁の本誌に8頁の「151号～200号執筆者索引」を付録にして計24頁となりました。中味もそれぞれ読み応えがあります。増頁で経費が心配ですが会員拡大で乗り切りたいものです。

私が「療原」の編集を引き継いだのは2007年5月号（170号）から。もう5年を超え、それだけ歳もとりました。編集職人の仕事、いつまで続けられるか。最近、体調をくずし心配しています。

9月例会は9月27日（木）午後、市職員会館かがわで開きます。岩井忠熊代表が戦後京都の民主運動を支えた人たちを「秘話」を交えて紹介します。案内ビラを同封していますのでぜひご出席ください。（湯浅）